

中国語授与型前置詞“给”の多機能性

陳 琦

要 旨

本稿では、現代中国語の授与動詞由来の前置詞“给”の多機能性、具体的にいうと授与行為の受け手 RCP、非授与行為の目標 GOAL、受益者 BEN、処置対象 PAT、使役状況における被使役者 CAUS、および受動状況における動作主 AGT をマークすることができる特徴について、従来の論考を踏まえた上で、各機能間の意味的関連性を解明した。

また、Croft (2001) が唱えた「意味地図連続性仮説」(Semantic Map Connectivity Hypothesis) に基づいて、上述した意味的関連性を示す意味地図を作成した。さらに、各機能の統語的・意味的制限を参考にし、その意味地図に修正を加えて、“给”の RCP 機能から AGT 機能までの可能の拡張経路を明らかにし、木村・楊(2008)が提案した[BEN⇒AGT]以外、[GOAL⇒AGT]の可能性を示唆した。

キーワード

给 意味連鎖 受け手 操られ手 状況誘発者 拡張経路

1 序論

使役と受動の対立は世界諸言語に多様な形で見られる。Haspelmath (1990) や Washio (1993)をはじめ、多数の類型論的研究では、同一の言語形式で使役と受動のいずれの意味をも表すことができる言語現象に対し、多言語資料に基づいて論じられてきた。

中国語においても使役文と受動文の対立が存在し、両者は共に[NP₁ + PREP + NP₂ + VP]の形になっている。ここでは、後方に来る NP₂ は前置詞 PREP の目的語であると同時に、後ろの VP の主語ともなる。使役文の場合、この NP₁ と NP₂ はそれぞれ使役者(causer)と被使役者(causee)であり、被使役者をマークするには“让”(ràng)、“叫”(jiào)などの前置詞が用いられる。例えば、次の(1)(2)のような使役文が挙げられる。

- (1) 这-游戏 让-无数人 着迷。
 この-ゲーム CAUS-無数の人 夢中になる
 「このゲームは無数の人を夢中にさせる。」
- (2) 天 热-得-叫-人-喘不过气来。
 天気 暑い-STAT-CAUS-人-息苦しい
 「暑さが人を息苦しくさせる。」

一方、受動文の場合、この NP₁ と NP₂ はそれぞれ受動者(patient)と動作主(agent)となっているが、動作主をマークするには“被”(bèi)が最も一般的に用いられる。そのほか、上述した“让”、“叫”も“被”を置き換え、受動文における動作主をマークすることができる。次は“被”、“让”、“叫”を用いた受動文の例である。

- (3) 他 被-人 打-伤-了。
 彼 AGT-人 毆る-怪我する-PFV/PF
 「彼は人に殴られて怪我をした。」
- (4) 手机 叫-他 弄-坏-了。
 携帯 AGT-彼 する-壊す-PFV/PF
 「携帯は彼に壊された。」
- (5) 树 让-大风 吹-倒-了。
 木 AGT-大風 吹く-倒れる-PFV/PF
 「木は大風に吹き倒された。」

一方、現代中国語(“普通话”)およびその基礎となる北京語などでは、授与動詞由来の前置詞“给”(gěi)が存在する。太田(1956)などで指摘されたように、“给”は授与行為の受け手(recipient)以外、受益者(beneficiary)、処置対象(disposal patient)、使役文における被使役者、または受動文における動作主などをマークする機能を備えることができる、多機能的な前置詞である。次はそれぞれ“给”が受け手、受益者、処置対象をマークする例であるが、“被”、“让”、“叫”と同様に[NP₁ + PREP + NP₂ + VP]の形になっている。

- (6) 我 给-他 寄-了 一-本-书。
 私 RCP-彼 送る-PFV 一-CLF-本
 「私は彼に本を送った。」
- (7) 妈妈 给-我 收拾-房间。
 母親 BEN-私 片付ける-部屋
 「母親は私に部屋を片付けてくれた。」
- (8) 他 立马 给-门 关-上-了。
 彼 すぐ PAT-ドア閉める-上がる-PFV
 「彼はすぐにドアを閉めた。」

ここで多くの中国語話者に少し不自然に感じられる(8)は、北京方言的な性格が強い表現である。同じ状況を表す際には“他立马把门关上了”とも言い換えられるので、ここの“给”は処置の意味を表す“把”(bǎ)と同様の機能を果たしていると言える。

また、次は“给”が被使役者、受動文の動作主をマークする例である。

- (9) 店长 给-他 休息-了-一会儿。
 店长 CAUS-彼 休憩-PFV-しばらく
 「店长は彼にしばらく休憩させた。」
- (10) 朋友 给-我 看-了-一-张-照片。
 友人 CAUS-私 見る-PFV-一-CLF-写真
 「友人は私に写真を見せた。」
- (11) 碗 给-他 打-碎-了。
 お皿 AGT-彼 打つ-割れる-PFV/PF
 「お皿は彼に割られてしまった。」
- (12) 衣服 给-树枝 挂-破-了。
 服 AGT-木の枝 ひっかける-破れる-PFV/PF
 「服は木の枝にひっかけられて破れてしまった。」

本稿では、上述のような授与動詞由来の多機能的な前置詞“给”を、「授与型前置詞(*give-type preposition*)」と呼ぶことにする。ここで、中国語(または北京語)の“给”の各機能の文法化・意味拡張の経路に関しては、既に多数の研究が行われてきたが、その中で主流になっているのは、Hashimoto (1988)などが提唱した、“给”がまず CAUS 機能を獲得し、さらに AGT 機能を獲得したという説である。それに対し、木村英樹(2005)や木村・楊(2008)などは、“给”の CAUS 機能が北京語では一般的な形で確立していないと指摘し、Hashimoto (1988)などの主張を認めにくいとし、代わりに“给”が BEN 機能から AGT 機能へと拡張したというプロセスを提案した。

本稿では、“给”に関する従来の論考を踏まえ、その問題点を取り上げながら、その各機能間の意味的関連性を明らかにし、使役・受動を含むヴォイスの類型論的研究に示唆を与えたい。

2 先行研究

前節ですでに触れたように、“给”の AGT 機能の獲得について、これまで主流となっている説明は、Hashimoto (1988)、江藍生(1999)、蒋绍愚(2002)などが提案した[CAUS⇒AGT]という意味拡張の仮説である。

通方言的な視点からすると、“给”のような授与型前置詞が AGT 機能を備える方言(標準語を含む)の多くでは、その前置詞が同時に CAUS 機能、少なくとも擬似的使役(*pseudo-causative*)のような機能を備えることは確かである。次の例を見てみよう((13)=(10)、(14)=(11))。

- (13) 朋友给我看了一张照片。

「友人は私に写真を見せた。」

(14) 碗给他打碎了。

「お皿は彼に割られてしまった。」

(13)では、「見る」という行為を行う人物は“給”でマークされる「私」である。この場合、「朋友让我看照片」(友人は私に写真を見させた)と同じように、「友人が私のある行為を許容した」という意味になり、一種の使役的表現と認めうる。一方、(14)の場合、「お皿を割る」という行為を行う人物、つまり動作主「彼」が“給”にとられているため、“給”は AGT 機能を果たしている、ということになる。

しかし、①CAUS 機能と AGT 機能の間に関連性があるとしても、必ずしも[CAUS⇒AGT]という意味拡張が成立するとは限らない。この仮説の妥当性、そして通方言的な普遍性に関しては、まだ検討する余地があると思われる。②“給”の各機能には具体的にどういう繋がりがあるかを解明しない限りは、その各機能がどのように派生してきたかについては、結論づけることができないだろう。以上の二つの疑問は、従来十分に議論されてきたとは言えないが、前者に関しては木村・楊(2008)が挙げられる。

木村・楊(2008)では、[CAUS⇒AGT]という主張は、授与型前置詞が CAUS と AGT 両方の機能を備えるタイプの方言(広東語など)には一定の説明力があるが、北京語のようなタイプには適用しないとされる。北京語の“给”は、(13)のような使役文では許容されるが、次のような場合には成立しない。

(15) * 店长 给-他 回去。

店长 CAUS-彼 帰る

「店長は彼に帰らせた。」

(16) * 警察 给-他 走。

警察 CAUS-彼 離れる

「警察は彼に離れさせた。」

木村・楊(2008)によると、(13)のほうが自然で、(15)や(16)のほうが不自然である理由は、文が表現する事態が授与行為に支えられているか否かという点にある。すなわち、(13)の「写真を見せる」という使役的状況が、写真を授与・提示する行為を前提に成立するのに対し、(15)(16)の「帰る」や「離れる」はいずれも対象を持たない行為で、その状況に授与行為という前提が存在しないが、北京語では授与行為に支えられない使役を“给”で表現することができないということである。さらに、次のような文の場合、対象が存在するにもかかわらず許容されにくいのは、その対象(「富士山」)が授与の対象とはなり得ないことが原因とされる。

- (17) * 朋友 给-我 看-富士山。
友人 CAUS-私 見る-富士山
「友人は私に富士山を見せた。」

(木村・楊 2008: 77)

授与行為の存在が“給”使役文の成立に不可欠な前提であるという観点の妥当性については、後節で詳しく取り扱うことにしたいが、上述の指摘の通り、北京語の“給”の CAUS 機能の実現には一定の制限が存在することは確実である。さらに一つの証拠として、山田(1998)、李炜(2002)などの調査の結果、18 世紀半ば以降の代表的な北京語文学作品から抽出した“給”が用いられた約 5000 例の中で、“給”使役文がわずかに数例しかないことから、“給”の CAUS 機能が北京語で一般的に定着していないことが確認された。しかしそれにもかかわらず“給”が AGT 機能を獲得したことは、従来の[CAUS⇒AGT]説には不備があることを示唆した。そこで、従来の解釈の修正として、木村・楊(2008)は[BEN⇒AGT]という拡張方向を提案した。

- (18) 妈妈 给-我 收拾-房间。
母親 BEN-私 片付ける-部屋
「母親は私に部屋を片付けてくれた。」
(19) 我 给-你 洗-碗。
私 BEN-あなた 洗う-お皿
「私はあなたにお皿を洗ってあげる。」

(18)と(19)は、“給”の BEN 機能の例である((18)=(7))。(18)では、「部屋を片付ける」という行為を行った人物は「母親」であり、「私」は直接に参加していないが、「母親」の行為により何らかの利益を受けた、ということになる。(19)でも同様に、「お皿を洗う」という行為の参加者でない「あなた」は、「私」のその行為により何らかの利益を受けた、ということになる。木村・楊(2008)の主張に従えば、(18)(19)の状況においては、「母親」や「私」はいずれも自らのために自律的に行動するのではなく、他人を明確に意識しながら他人のために行動するため、他人である「私」や「あなた」は、受益者としての性格もあれば、行為の誘発者、「動作主によって明確に意識された動作行為の動機」(木村・楊 2008: 79)としての一面も有している。“給”の[BEN⇒AGT]という拡張の動機は、“給”で表す人物のこういった「行為の誘発者」的な側面と、受動文の動作主の「状況の誘発者」的な側面の間に成り立つ意味連鎖にある、と木村・楊(2008)は主張している。本稿では、この主張について、筆者は賛同する。

3 “給”の各機能間の意味連鎖

本節では、後節の分析の基礎として、中国語“給”の各機能間の意味的関連性を明らかにしたい。なお、各機能を逐一取り上げると説明が複雑になるので、本節ではそのうちの三つの機能、それぞれ RCP 機能、CAUS 機能、BEN 機能を議論の出発点とし、これらの機能とその他の機能の間の関連性を見ていきたい。

3.1 “受け手”の意味連鎖：RCP を中心に

上述の(6)は、中国語“給”の RCP 機能を示す例であるが、ここで参考として再掲する((20)=(6))。

(20) 我给他寄了一本书。

「私は彼に本を送った。」

この“給”は、アスペクト辞“了”の後続が許容されないので、ふつうの授与表現“我寄给了他一本书”の“给”を比べると、すでにある程度の文法化(意味の漂白)を遂げており、授与動詞としての実質的意味が薄くなっている。しかしその一方、授与表現の間接目的語をマークする構文的機能、つまり RCP/DAT 機能が保留されており、この RCP 機能は、“给”の前置詞としての最も基本的な機能と言えるだろう。

さらに、中国語では以下のような文も成立するが、ここで“给”でマークされ、受け手の位置に立つものは上述の(20)の「彼」とは性格上で何らかの違いが見られる。

(21) 他 给-大家 唱-歌。

彼 ?-皆 歌う-歌

「彼は皆に歌を歌った。」

(22) 他 给-孩子 做-饭。

彼 ?-子供 作る-料理

「彼は子供に料理を作った。」

(23) 妈妈 买-书 给-孩子 读。

母親 買う-本 ?-子供 読む

「母親は子供が読むように、子供に本を買った。」

(24) 他 唱-歌 给-大家 听。

彼 歌う-歌 ?-皆 聞く

「彼は皆が聞くように、皆に歌を歌った。」

「送る」や「渡す」などの授与行為は、授与者、授与物、および被授与者という三者の存在に支えられるため、本質的には何らかの方向性がある行為である。それに対し、(21)(22)の「歌を歌う」や「料理を作る」などは、本来方向性がない、動作主自身 1 人でも行われ

る行為であり、授与の意味が含まれていない。この場合、“給”が果たす機能は、その方向性がない行為に方向性を付与することにある。そうすると、たとえ動作主が自身 1 人で行った行為であっても、何らかの結果や影響を生み出し、その目当てとなる相手に伝達していくことが考えられる。たとえば、動作主が相手に向かって歌を歌う場合、音符や歌詞が書かれている紙のようなものは当然存在しないが、音声としての「歌」がその相手の耳に届くのは必然的である。本稿では、こういう方向性がない行為の相手を受け手と区別し、目標(goal)と呼ぶことにする。また、そのターゲットをマークする前置詞機能を、GOAL 機能と呼ぶことにする。

さらに、(23)(24)は、一見「本を買う」のような方向性のある状況にせよ、「歌を歌う」のような方向性のない状況にせよ、前置詞でマークされている「子供」や「皆」に動詞「読む」と「聞く」が後続し、“妈妈买书给孩子，孩子读”や“他唱歌给大家，大家听”の形になり、「兼語文」¹となる。英語で言い換えれば Mom bought a book *for* her child to read や He sang a song *for* the others to enjoy になるが、上述の中国語文の“給”はこの英語文の *for* と同じ機能を果たしており、動作主の行為の目標を導く前置詞となる。つまり、(23)(24)の“給”も(21)(22)の“給”も、「その相手のために動作主が何かをする」という状況を表す前置詞で、近い性格を持っている。本稿では、このような前置詞を、同じく GOAL 前置詞と呼ぶことにする。

最後に、上述の(18)(19)で示したように、“給”にはさらに BEN 機能を有している。BEN 機能を果たす“給”の文は、構文的には(21)(22)のような GOAL 機能の文とよく類似しているが、意味的にはそれらの文と違って、何らかの実体的な目標を持つ行為の存在が認めにくい。たとえば(19)では、「皿を洗う」は誰かに向かって行う行為とは考えられない。しかし、(18)(19)は(21)(22)よりも「相手に何らかの利益を与える」というニュアンスが一層強く感じられるため、その利益を受け入れる BEN も、当然受け手的な存在と考えられる。

以上、3.1 節をまとめると、“給”でマークされる NP が表す対象のうち、受け手 RCP、目標 GOAL、および受益者 BEN という三つの proto-patient の間には、互いに微妙に異なっているが、「何らかの有形のモノまたは無形のコトの受け手」という共通した特徴が認められる。この三者の間に成立する意味連鎖は、本稿では「“受け手”の意味連鎖」と呼ぶことにする。

3.2 “操られ手”の意味連鎖：CAUS を中心に

前節で既に触れたように、中国語の“給”の CAUS 機能の実現には一定の制限が存在している。本節では、その制限とはどういったものなのかを解明した上、CAUS 機能と他機能の比較を行っていきたい。

この制限について、木村・楊(2008)は「使役的事態の背景に授与行為が前提として存在す

¹ 兼語文とは、述語部分が[V₁ + NP + V₂]の形になっており、NP が V₁の目的語でありながら V₂の主語でもある、というタイプの文をさす。

るか否か」と説明したが、次の例を見ると、この説明の妥当性について再検討する必要があるようである((25)=(9))。

(25) 店长给他休息了一会儿。

「店長は彼にしばらく休憩させた。」

(10)の“朋友给我看了一张照片”(友人が私に写真を見せた)の状況とは異なり、(25)では「しばらく休憩させた」という状況であるが、何らかのものの授与や提示により成立する状況とは考えにくい。たとえこの「しばらく」を一定の時間の流れという無形のコトと認識するとしても、その時間の流れは、動作主が個人の意志により伝達可能なコトとは考えられない。筆者の内省では、このような状況を授与行為に関わる状況と認識するより、むしろ「しばらく」という一定の時間を休憩に利用しようとする「彼」に対し、「店長」が許可を与える、という「権限付与」(authorization)的な状況の性格が強いと感じられる。

一方、次の例も問題なく成立するが、何らかの授与行為を含意するとは考えにくい。

(26) 我 从不 给-人 走-后门。
私 決して～ない CAUS-人 歩く-裏口

「私は決して人にコネを使わせはしない。」

(26)では、“走后门”には文字通りのまま「裏口から入る」という意味と、「コネを使う」というメタファー的な意味があるが、いずれにせよ、「私」は「人」に何か実在のものを与えるという場面は想定しにくい。その代わりに、むしろ(25)と同じように、「人」が「私」に関係する何らかの「裏口」や「コネ」を利用しようとする意欲にこたえ、「私」が権限や許可を与える、という程度の解釈が妥当であろう。

なお、(25)(26)では、動詞“休息”や“走”に“一会儿”や“后门”が後続し、形態上「述語-目的語」のように見えるが、それは何らかのものの授与が存在するという印象を与えやすい。しかし、“休息”は自動詞で対象を取らないことや、“走后门”の“后门”は移動の経路で対象ではないことから考えると、この二つの例が表す状況は、いずれも授与行為が含まれていない状況であることがわかる。

以上の考察から見ると、中国語の“给”使役文の成立には、授与行為という前提が必ずしも必要ではない。そうすると、残りの問題は二つある。まず、(15)(16)が不自然な理由は、おそらく“回去”(帰る)や“走”(離れる)はいずれも自動詞で、動作の対象をつけることができないことにあとで解釈できるが、(17)では他動詞“看”が用いられているにも関わらず自然でない原因は何であろうか。さらに、次の(27)(28)と(17)との間の許容度の差について、どのような解釈がありうるか。

- (27) * 朋友 給-我 看-富士山。
友人 CAUS-私 見る-富士山
「友人は私に富士山を見させた。」
- (28) ??社長 給-他 参观-公司大楼。
社長 CAUS-彼 見学-会社のビル
「社長は彼に会社のビルを見学させた。」
- (29) 我 給-朋友 看-我的房间。
私 CAUS-友人 見る-私の部屋
「私は友人に私の部屋を見させた。」

文の許容度は(27)～(29)の順序で次第に高まっていくが、この三つの文の最も大きな違いは何かというと、文末にある名詞句が表す対象、「富士山」「会社のビル」「私の部屋」の性質の違いである。具体的に言えば、この三者に対し、人間がどの程度で意のままに変えたり、操作したりすることができるかどうかという違いである。「富士山」など巨大な自然物は、誰でも勝手に変化させられないのに対し、「会社のビル」は、形としては大きい、人工物なのである程度人為的に操作することができる(たとえば、入口に施錠し侵入不可能な仕組みにすることや、工事などで外見を変えることなど)。一方、「部屋」の場合、比較的に小型の人工物なので、ビルなどよりも簡単に変化させることができる(ドアの開閉や家具の配置など)。つまり、“給”使役文の文末にくる名詞が表す対象は、ある程度で操作可能なものでなければならない。これは、“給”使役文が表す状況は使用权や操作権の一時的譲渡であるが、そもそも操作不可能な対象であれば、当然操作権の譲渡も不可能になるのが原因であろう。

以上の分析をまとめると、中国語の“給”使役文の成立には、次の三つの制限が存在する。

- 制限(ア)： “給”使役文が表す状況は、権限付与的・許容的状況(permissive situation)に限られる。
- 制限(イ)： 構文的には、“給”前置詞句に後続する動詞句は、目的語を持つ他動詞句、または“休息一会儿”や“走后门”など、目的語に見える成分を持つ自動詞句に限られる。
- 制限(ウ)： 意味的には、上述の目的語が表す対象が実在の存在の場合、その存在は人間によって変化させたり操作したりすることができるものに限られる。

上述した“給”使役文は、いずれも使役者が被使役者の何らかの希望にこたえ、権限や許可を出す、という状況を表す文である。Newman (1996: 171)の指摘によると、このような文は permission や enablement の状況を表し、ある事態を実現するための条件を提供する、

つまり「希望通りにさせる」というニュアンスが強い。そうすると、この使役者と被使役者との関係は、積極的な立場にある、相手の行動を操る「操り手」と、消極的な立場にある、自分の行動に決定権を持たない「操られ手」と捉えることができる。

さらに、消極的に操られるという特徴をいうと、“給”のそれ以外の二つの機能、PAT 機能と BEN 機能も同様に捉えられる。次の例を見てみよう((30)=(8))。

(30) 他立马给门关上了。

「彼はすぐにドアを閉めた。」

(31) 爸爸给他揍了一顿。

「父親は彼をぶん殴った。」

(30)では、“給”は“关上”(閉める)の目的語“门”(ドア)をとり、処置の対象をマークする機能を果たしている。「ドア」は自主的意識を持たない無生物なので、人によって開かれても閉められても、抵抗しようともできない、「操られ手」という性格の持ち主である特徴が明らかである。また、処置の対象が有生物である(31)では、「彼」がいくら自主的意識を持っていたとしても、殴られた者として消極的な立場に置かれる事実は変わらない。

一方、BEN 機能を果たす“给”文では、上述(18)(19)の例以外、次のような例がある。

(32) 妈妈 给-孩子 穿-衣服。

母 BEN-子供 着せる-服

「母は子供に服を着せた。」

(33) 妈妈 给-孩子 穿-了-里三层外三层的衣服。

母 BEN-子供 着せる-PFV-とえはたえの服

「母は子供に何重もの服を着せた。」

(32)では、「服を着せる」という状況は、受益的状況と解釈されるのが一般的であるが、(33)では、構文上の変化はないが意味的には受益のニュアンスが薄くなる。それは、「服を着せる」という動作を自発的に行うのは「母」で、「子供」はほとんどその動作の執行に参加していない、というのが原因であろう。「子供」としては、「服を着せる」という状況を操る権利を母に譲っている、という消極的な立場にあるので、たとえ相手の本意が自分に利益を与えるためであっても、逆に被害を受ける状況も十分考えられる。(18)の「部屋を片付ける」という状況の場合、“妈妈给我把房间收拾乱了”(母は私のために部屋を片付けたが、結局部屋は散らかるようになった)という文も問題なく成立するのもその一例である。

以上、3.2 節をまとめると、“给”でマークされる NP が表す対象のうち、被使役者 CAUS、処置対象 PAT、および受益者 BEN という三者の間には、「消極的な立場にあり、他者に操られるもの」という共通した特徴が観察される。この三者の間に成り立つ意味連鎖は、本

稿では「“操られ手”の意味連鎖」と呼ぶことにする。

3.3 “状況誘発者”の意味連鎖：BEN を中心に

受益者と受動文の動作主の間に成り立つ意味連鎖について、2 節で述べたように、木村・楊(2008)ではすでに十分な議論がなされているので、ここではあえて再述しない。

その補充として、受益者と受動文動作主のこういった性格は、“給”使役文にも観察できる。ここでは次の状況を取り上げる。

(34) * 店长给他加班。

「店長は彼に残業させた。」

(35) ? 禁不住他多番请求, 店长终于同意给他加班了。

「彼の度々の依頼に耐えられず、店長はようやく彼に残業させることに同意した。」

我々の常識から言えば、残業するのを好ましくないことと認識するのが一般的である。前節でも触れたように、“給”使役文は、いずれも「希望通りにさせる」という意味を持つ許容的な状況を表す文であるが、(34)の許容度が低いのは、その文の「店長は彼の残業要求を許可した」という解釈は、「残業しようとする希望を持つ人はまずいない」という人間の慣習的な考えに抵触することにある。一方、(35)のように、「そういう希望を持つ人だ」という前提的情報を明示すると、文の許容度もかなり上がる。

一方、上述のような文と違って、次のような文は、そもそも前提的情報を提示することが不可能である。

(36) * 他给笔掉到地上了。

「彼はペンを地面に落ちさせた。」

(37) * 他给菜烂掉了。

「彼は野菜を腐らせた。」

(36)(37)では、人間ではなく、「ペン」「料理」が被使役者の位置にある許容使役文であるが、いずれも不自然な文である。その原因は、「ペン」や「料理」は自主性や意志性、当然希望をも持たない無生物なので、「相手の希望を満たすためにさせる」という意味を表す“給”使役文の被使役者にはなりにくいことにある。すなわち、“給”使役文では、被使役者の有生性(animacy)や意志性(volition)が要求される。こういった使役文の使役者は、常に「相手の希望を意識した上で許可を与える」という性格を有しているため、相手の被使役者は、その使役者の許与行為を引き起こす動機、一種の「行為の誘発者」と捉えることが

できる。

さらに、(21)～(24)の文についても上述の説明が適用されるが、目標 GOAL となる人物は、3.1 節ですでに論じたように、いずれも動作主の行為の「目当て」であり、受益者に近い存在である。こういった GOAL も、一種の「行為の誘発者」と捉えられる。

以上、3.3 節をまとめると、“給”でマークされる NP が表す対象のうち、受益者 BEN、受動文の動作主 AGT、被使役者 CAUS、および目標 GOAL という四者の間には、「他者の行為を誘発する動機的な存在」という共通した特徴が見られる。この四者の間に成り立つ意味連鎖は、本稿では「“状況誘発者”の意味連鎖」と呼ぶことにする。

4 “給”の各機能の意味地図

4.1 理論的前提

本節では、意味地図(semantic map)の理論を利用し、“給”の多機能性を分析したい。意味地図の構築に関する基本的な考えは、下記 Haiman (1974)の説明の通りである。

“If a word exhibits polysemy in one language, one may be inclined, or forced, to dismiss its various meanings as coincidental; if a corresponding word in another language exhibits the same, or closely parallel polysemy, it becomes an extremely interesting coincidence; if it displays the same polysemy in four, five, or seven genetically unrelated languages, by statistical law it ceases to be a coincidence at all.” (Haiman 1974: 341)

要するに、個別言語における特定の語が何らかの多機能性を表すのは偶然である可能性があるが、もし複数の他言語にも同様の多機能性または類似した多機能性を表す語の存在が確認されると、それはもはや偶然ではなく、人類の思考方式の何らかの共通性を反映する現象と考えられる。

さらに、Croft (2001)は、上述の考えを、語だけではなく言語形式の範疇まで広げて、次のような「意味地図連続性仮説」(Semantic Map Connectivity Hypothesis)を提唱した。

“Any relevant language-specific and/or construction-specific category should map onto a CONNECTED REGION in conceptual space.” (Croft 2001:134)

この仮説によると、単一または複数言語において類似性が見られるいくつかの言語形式は、概念スペース上の連続領域(connected region)で示すことができる。そうすると、同一の形態で複数の機能を持つ言語形式、例えば“給”のような前置詞も当然、同様に捉えられる。“給”の各機能をノードで、各機能の意味的関連性をノードを結ぶ線で示すと、ネットワークが成立する。また、概念スペース上の領域は分断されていると「連続的」にならないので、連続領域の成立には、ノードの重複を伴わないという前提が考えられる。

4.2 意味地図の構築

前節で論じてきたように、中国語の前置詞“給”の多機能性について、次のように三つの意味連鎖、それぞれ①[RCP-GOAL-BEN]という“受け手”の連鎖、②[CAUS-PAT-BEN]という“操られ手”の連鎖、③[BEN-CAUS-AGT-GOAL]という“状況誘発者”の連鎖、が観察される。

表 1 前置詞“給”の各機能間に見られる意味連鎖

“受け手”	“操られ手”	“状況誘発者”
RCP		
GOAL		GOAL
BEN	BEN	BEN
	CAUS	CAUS
	PAT	
		AGT

ここの合計六種類の機能は、いずれも授与動詞から文法化して、さらにそれぞれ異なる経路の意味拡張によって派生してきたものなので、上述の三つの意味連鎖をノード(機能)の重複がないように結び付け、連続領域を作成することができる。

なお、この三つの連鎖の間で、互いに共通している部分はそれぞれ[GOAL-BEN]と[BEN-CAUS]なので、[GOAL-BEN-CAUS]を中心に連続領域を構築するのが妥当であろう。意味地図連続性仮説に違反しないことを前提にすれば、次のような連続領域が考えられる。

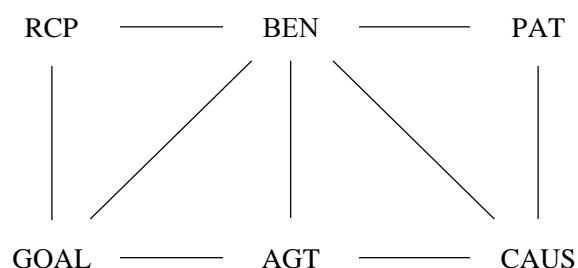


図 1 前置詞“給”の各機能の意味地図(仮)

図 1 の意味地図は、表 1 で示された“給”の各機能を重複なく、もれなくカバーしており、この各機能間に見られる意味連鎖の結び方も連続性仮説に違反しないため、妥当的と判断して良い。

ただし、先行研究で取り扱われた“給”の意味拡張の経路の解明に関しては、各機能の統語的・意味的な制限を考えると、意味地図において機能と機能を結ぶ線は、いずれも双方向的なもののわけではない。例えば、PAT と CAUS、さらにいうと *disposal patient* と *permissive causee* の関係について、PAT が操作的状況における対象で、CAUS が許容的状況における対象なので、この両者の直接的な連鎖は、使役表現に通常見られる[操作–指示–許容]の連続性に違反することになるので(「指示」の一環が欠けるため)、成立しにくい。また、“給”の CAUS 機能の実現には三つもの制限が関わっており、一般的な形で定着した機能とは言えないため、[CAUS⇒AGT]という拡張方向の成立も考えにくい。

そうすると、“給”の各機能の制限を考慮に入れると、RCP から AGT までの possible 拡張経路は、次のように示すことができる。

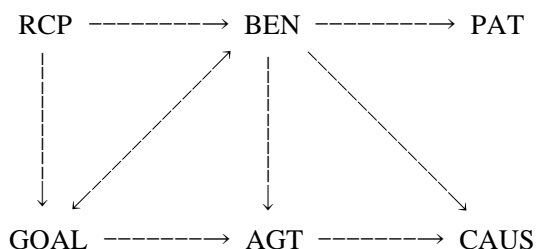


図 2 前置詞“給”の各機能の意味拡張の経路

ここで、RCP は授与動詞“給”構文の間接目的語に近い存在と捉えることができるため、[RCP⇒GOAL]や[RCP⇒BEN]の単方向性は明らかであるが、[BEN⇒AGT]や[GOAL⇒AGT]の逆の方向性を排除したのは、“給”構文における BEN や GOAL は、いずれも RCP と同様で、その主語 N_1 に比べて意志性が低い存在であるためである。一方、“給”構文における AGT は、その主語 N_1 に比べて意志性が高い存在であるが、“給”の意味拡張により意志性を得た AGT が、再び意志性を失い、BEN や GOAL になるということは考えにくい。

以上、さらなる証拠がない限りでは、前置詞“給”の AGT 機能は、BEN 機能からの派生と GOAL 機能からの派生という二つの拡張経路が可能である、という結論にたどり着いた。木村・楊(2008)が提案した[BEN⇒AGT]以外、さらに[GOAL⇒AGT]の可能性を示唆した。

5 終わりに

本稿では、現代中国語の“給”という、授与行為の受け手 RCP、非授与行為の目標 GOAL、受益者 BEN、処置対象 PAT、使役状況における被使役者 CAUS、および受動状況における動作主 AGT をマークすることができる、多機能的な前置詞を対象にし、従来の論考を踏まえた上で、各機能間の意味的関連性を解明した。

また、Croft (2001)が唱えた「意味地図連続性仮説」(Semantic Map Connectivity Hypothesis)

に基づいて、上述した意味的関連性を示す意味地図を作成した。さらに、各機能の統語的・意味的制限を参考にし、その意味地図に修正を加えて、“給”の RCP から AGT までの可能な拡張経路を明らかにし、[BEN⇒AGT]以外、[GOAL⇒AGT]の可能性を示唆した。

今後の課題としては、より精緻な通言語的調査をした上で、本稿の結論を検証・拡充していきたい。さらに、陳(2013)で取り上げた受動的意味を帯びる使役表現や、本稿で取り上げた多機能を持つ授与型前置詞は、いずれも使役と受動との密接な関連性を示す現象で、今後は引き続き、対照的な視点からその現象に関する考察を深化させていきたい。

略語一覧

PREP = preposition / RCP = recipient / GOAL = goal / BEN = beneficiary / PAT = (disposal) patient / CAUS = causee / AGT = (passive) agent / CLF = classifier / PFV = perfective aspect / PF = perfect aspect / STAT = stative complement marker

参考文献

- 太田辰夫 (1956) 「「給」について」『神戸外大論叢』7 (1-3): 177-197.
- 木村英樹・楊凱榮 (2008) 「授与と受動の構文ネットワーク—中国語授与動詞の文法化に関する方言比較文法試論—」生越直樹・木村英樹・鷲尾龍一 (編著)『ヴォイスの対照研究』65-91,くろしお出版.
- 陳琦 (2013) 「受動再考：力のベクトルの視点から」中国人民大学修士学位論文.
- 山田忠司 (1998) 「北京語における「給」の発達について」『大阪産業大学論集 人文科学編』96,51-61.
- Haiman, J. (1974) Concessives, conditionals, and verbs of volition. *Foundations of Language* 11: 341-359.
- Hashimoto, M. J. (1988) The structure and typology of the Chinese passive construction. In: Masayoshi Shibatani (ed.), *Passive and Voice*, 329-354). John Benjamins.
- Haspelmath, M. (1990) The grammaticization of passive morphology. *Studies in Language* 14 (1): 25-71.
- Newman, J. (1996) *Give: A Cognitive Linguistic Study*. Mouton de Gruyter.
- Washio, R. (1993) When causative means passive: a cross-linguistic perspective. *Journal of East Asian Linguistics* 2: 45-90.
- 木村英樹 (2005) 「北京話“给”字句扩展为被动句的语义动因」『汉语学报』2: 14-21.
- 江藍生 (1999) 「汉语使役与被动兼用探源」『近代汉语探源』221-236,商务印书馆.
- 蒋绍愚 (2002) 「“给”字句、“教”字句表被动的来源」『语言学论丛(第 26 辑)』159-177,商务印书馆.
- 李 炜 (2002) 「清中叶以来使役“给”的历时考察与分析」『中山大学学报(社会科学版)』42(3): 62-66.
- (陳琦 筑波大学大学院生)

The multifunctional preposition *gěi* in Mandarin Chinese

CHEN Qi

In this paper, we discuss the multifunctionality of the preposition *gěi* in Mandarin Chinese, which originally derived from the verb *gěi* ‘give’. Specifically, its function to mark the recipient (RCP) in a situation involving a giving act, the target (GOAL) in a non-giving situation, the beneficiary (BEN), the disposal patient (PAT), the causee (CAUS) in a causative situation, or the agent (AGT) in a passive situation. Our study aims to clarify the semantic relevance between each function, and to suggest how the conventional discussion should be augmented.

Furthermore, in accordance with the Semantic Map Connectivity Hypothesis advocated by Croft (2001), a semantic map showing the above-mentioned semantic relevance was constructed. We modified the semantic map based on the syntactic and semantic restrictions of each function, and proposed a possible semantic extension path of [GOAL \Rightarrow AGT], in addition to the [BEN \Rightarrow AGT] proposal made by Kimura & Yang (2008).